

# Library News

図書館だより

No. 35

Nara National College of Technology

1993年7月 奈良工業高等専門学校図書館発行



電子制御工学科4年・中居亜子さん模写：フラゴナール「読書する女」

## 「真理がわれらを自由にする」

図書館長 細井 誠 司

「真理がわれらを自由にする」—国立国会図書館に入ると、カウンター正面の真上に大きく刻まれたこの言葉が、目の中に飛び込んできます。並んで彫られた横文字は、ギリシャ語でしょうか。先哲は誰の言葉でどういう意味なのか、いつか調べてみたいものだと思います。

調べあぐねて先日のこと、直接電話で問い合わせると、意外な事実が判りました。この言葉は、『国立国会図書館法』の前文からの引用であり、ギリシャ語は、『ヨハネ福音書』第8章32節の「真理が汝らを自由にするであろう」という言葉である、したがって日本語と厳密に対応しているわけではない、図書館法の前文はこの言葉からとったらしい、ということでした。

『国立国会図書館法』は、戦後間もない昭和23年に制定されています。だからその前文は、あの愚かしく忌まわしい昭和前半史への痛切な反省の上に立って、無知蒙昧からの解放と真理探求の尊さを高らかに謳いあげることにより、新生日本の門出の言葉としたのに違いありません。国立国会図書館は、国民にも広く開かれた知識の泉として出発したのです。あれから45年、現在の社会的状況は、当時と比べて大きく変わりました。しかし、「真理がわれらを自由にする」点においては、何ら変わるところもないはずで。

諸君は、図書館をよく利用しているでしょうか。図書館は人間の英知、人類普遍の真理の宝庫です。どうかその中に深く分け入って、先人たちの知恵に学んでください。些細なことでも不明な点は、直ちに資料に当たって調べてみましょう。未知なるものへのチャレンジ精神、飽くことのない探求心—これあってこそ私たちは、知的に輝き、日々新たになり、真の意味での自由へと導かれ得るのです。

本校の図書館は、夜8時まで開かれています。部活の帰りにちょっと寄って、小説を借り出して行く人もいます。土曜日の一日、図書室で静かに読書にふける人も見かけます。若き日の読書は、深く心に刻み込まれて、後々までも忘れ難いものとなるのです。もっともっと多く図書館を利用することによって生涯にわたる勉学と読書の基礎を今しっかりと築いてください、そう願っています。

---

## 目 次

- 1 巻頭言 「真理がわれわれを自由にする」…………… 図書館長 細井誠二
  - 2 「ゆとり」ということ …………… 本校名誉教授 石垣 昭
  - 3 卒業生からのメッセージ
  - 4 心に残る一冊の本（その4）
  - 5 図書委員会報告
  - 6 読書感想文コンクール「参考図書」一覧
  - 7 図書館関係資料
    - 平成4年度図書館利用状況
    - 貸出図書統計表
    - 寄贈図書リスト
-

# 「ゆとり」ということ

本校名誉教授 石垣 昭

「ゆとり」の語源は「ゆとる」から由来し「ゆとる」とは道草をくうことであると書いてあった。自動車のハンドルにも機械的な遊びが必要なように我々の生活にも心の余裕が必要なのであろう。

私が二十才になるまで学んだ旧制の薬学専門学校（現在の薬科大）は薬剤師の国家試験資格を取ることを最優先の目標にしてびっしりと時間割りが組まれ全科目必修で休講もなく、ゆとりには程遠い毎日であった。毎日の実験実習は嫌いではなかったし、東大出身のK先生の有機化学の講義は当時の最新の高度な内容で大変魅力的だった。わたしが卒業後大学の理学部をめざしたのも、この有機化学に触発されたためである。数多くの科目のなかに応用微生物学があり京大農学部でN先生が非常勤講師として講義をされた。その中で、たまには専門の勉強を離れて学校の近くの山科の疎水べりを散歩して豊かな自然に触れてはどうかと言われた。そこで折りをみて疎水べりにいってみた。疎水は琵琶湖と京都をつなぐ人工の運河で山裾の小高い所を流れ、眼下に山科盆地が広がり、こんなところを絵に描いたら素晴らしいなと思った。絵を描くことに興味を持ったのはこの頃からである。

卒業後、国家試験はパスしたものの、もっと化学を理学部で基礎から勉強したいという思いが強く、翌年京大理学部に入學した。当時の京大は前の学校とはうってかわって、いくらでも自由な時間を持つことができた。特に理学部は湯川先生がノーベル賞を授賞された頃で、自分の責任で勉強することが当たり前という雰囲気勉強することは強制されなかった。当時の私はそれを良いことに学校の勉強よりも絵を描くことに熱中し、よく教養部の研究室に上野照夫先生を訪ね自分の描いたスケッチを持ち込んで見て頂いた。上野先生は文学部出身、作家の井上靖さんと同級で、私の学生時代は教養部の芸術学の講義を担当され、また朝日や毎日新聞の美術批評も執筆しておられた。先生にとって私のような素人の稚拙な絵を批評することなど今考えると随分ご迷惑だったと思う。しかし先生は嫌な顔ひとつさえず熱心に見てくださった。私の絵に対する先生の批評はまず良いところを充分に褒めてから、最後に一言悪いところを指摘するというやり方で自信をなくさず少しづつ絵の良否がわかるようになった。これはプロの画家と違って素人の学生の場合、初めから厳しく欠点のみを指摘すると本人がやる気をなくすので教育的配慮からそうしたのだと卒業後うかがった。このことは教育者としての先生のお考えとして教職についてからも大変参考になった。先生のご専門は日本とシルクロードやインドを含む古代美術の壮大な東西交流の研究で先駆的な役割を果たされ、また、評論家として在野の新進気鋭の画家を育てられた。文学部を退官と同時に名誉教授とされたが70才を前に惜しくも亡くなられた。京大創立90周年記念に編纂された「京大史記」の井上靖、桑原武夫両先生の対談の中にも先生のことが惜しまれている。私も短い期間ではあったが先生のご薫陶によって芸術や文化財の意義を基本から教えられ、それまでの化学の専門中心の読書の範囲が大きく広がった。

その後、民間企業で研究開発に13年間過ごし、縁あって本校の化学工学科創設以来24年間お世話になり退官したが、この間、忙しさにかまけて絵筆を取ることも稀となった。60才を過ぎる頃からそれまでの時間に追われる多忙な生活に虚しさを感じ、時々スケッチブックを持って矢田丘陵や学校近くの大和民俗公園に出かけた。矢田寺の近くでスケッチブックを拡げているら矢田寺の坊さんにお仕事ですかと声をかけられたり、矢田山の狭い山道の曲がり角で、いきなり大きな犬と鉢合わせになり、驚いた犬は身構えた私がやおらスケッチブックを取り出すと安心して道を譲ってくれたり色々と思い出がある。春の芽吹き、初夏の青葉、秋の紅葉、冬の木枯しと日溜り、われを忘れ自然に没入するうちスケッチもいつしか百枚を超え、私も心のゆとりを取り戻したことを実感している。

私が赴任した頃の高専は過密な教育課程でゆとりの無いことで有名だったが、現在は週休二日制も導入され以前とは比較にならぬ程ゆとりのある状態になっている。本校は歴史的風土と豊かな自然に恵まれ、図書館は土曜日にも開館される等恵まれた条件にある。ノーベル賞授賞者の福井謙一先生も専門分

野に凝り固まらず一見無関係な分野の学習の大切さを指摘されている。大学受験の枠に縛られない高専で、これらのゆとりを将来のためにどう生かすかは学生諸君自身の工夫次第であろう。

## 卒業生からのメッセージ

### 本が苦手な私でも…

機械工学科 藤城 順之

はっきり言って私は、本をあまり多くは読まない。年に数冊というぐらいで、ひどい年には読書感想文を書くために、がんばって一冊ぐらいしか読まなかった時もある。そんな私がなぜ図書館だよりも、出演しているのか自分でも不思議なぐらいである。

しかし、本を読まない、本が苦手だからと言って図書館にまったく行かなかったかというところではない。むしろ、結構かよっていた方だと思う。そしたら、何をしに行っていたか。夏は涼みに冬は温もりに。授業が自習だと友達とビデオ鑑賞しに行ったりしていた。ビデオを見て笑ったり、大声でしゃべってしまったりして図書館の係の人に注意された事も何回かあった。静かな雰囲気を楽しんで来ている人には、結構、迷惑な奴らだったかもしれない。この場をかりて、謝っておこう。ゴメンナサイ！

この他に図書館へかよった理由として「図書館の係のおばさん達がとても親切でよい人達なので…」ということもあげられる。レポートの調べものをしていて、なかなか見つからないから図書館の係のおばさんに、「こういう関係の本、ないですか？」と聞くと、今していた仕事をそっちのけで、さがしてくれて、それでも見つからなかったからコンピューターを使って一生懸命さがしてくださったのには、感動しました。その結末が、貸し出し中なのには、ちょっと悲しかったけど…。

私は、そんな親切なおばさん達に出会うまでは、本が苦手よりも図書館が苦手でした。シーンと静かでしゃべりにくく、周りには苦手な本がダラーとならんでいて、図書館にただで、なんかボーッと疲れてきてしまったりもしました。けど今は違います。高専の図書館は、本を読むための所ではないということが分かったからです。テスト前などには勉強する所にもなるし、夏は涼しく冬

は温かいため何でもできる所だということに気付いたからです。しかし、みなさん、ビデオ鑑賞する時などは大声で笑ったり、叫んだりすることのないように気を付けてください。愛のムチが飛んできますから…。

卒業を前にひかえた私は図書館の本をグルッと一周みてまわりました。すると、どうでしょう、本が苦手だったはずなのに、「あっ、これおもしろそうやなあー。」「あっ、こんな本あったんかー。」などと思ってしまったんです。「もっと早くに気が付くべきだったー。」と後悔しています。みなさんは、こんな事がないように、それぞれ残された高専生活の中で計画して図書館を利用してみたいのではないのでしょうか。

卒業式の前日、本が苦手だった私は、図書館に足をこび一冊の本を読み、二本の映画を見てしまったのでした。

### 「図書館と私」

機械工学科 楠 欣浩

昭和63年4月、私は奈良工業高専に入学しました。入学当時、図書館が大きい、と思った事を覚えています。

それまでの、つまり私が中学校（私の出身は大阪府島本町立第二中学校）に在学していた時の図書館といえば、教室を2つつなぎあわせた様な部屋で、蔵書数も多くはありませんでした。公立の図書館には度々足を運びましたが、そこすら高専の図書館よりも狭かったように思います。かててくわえて、当時は電算機による蔵書検索などあるわけもなく、比較的整理された新書ですら目的の本を探すのは難しく、雑然と並んだ文庫本の棚には閉口させられました。以上のような経緯もあり、中学時代の私の足は図書館より遠ざかっていました。

さて、私は高専入学当初、電車通学であったので、その時間を読書にあてました。中学の時から読書は嫌いではなかったので、次第に本屋に入り

浸るようになりました。当初は文庫本を求めていたのですが、しばらくすると新刊書が欲しくなりました。が、とても高価でおいそれと買えるものでもありません。そこで、図書館に入れてもらおうと思い、図書委員になったのです。

低学年のうち、本を読んだり、雑誌を眺めたり、という所だった図書館は、高学年になるに従って、レポート、試験勉強の場へと変わっていきます。これは、みなさん同じだと思います。私が図書委員としてカウンターで貸し出しの手伝いをしていた時、学制服を着た人と私服を着た人では明らかに貸し出す本の種類が異なっていました。つまり、学生服着た人は雑多な文庫、文芸書が多く、私服の人は専門書が多いのです。又、カウンターと言えば、希望図書のノートが置いてあったのを思い出します。手の空いてる時にノートを見ていると、実に楽しくなります。まったく、世の中には色々な人がいるものだ、と、感心したりなんかします。近年、このノートには、ビデオやLDの希望も書かれるようになりました。その為かどうかわかりませんが、最近、LDやビデオソフトが一段と充実したような気がします。

もっとも、中には授業をサボってビデオを見ている、という強者もいるようですが。

さて、最近の図書館の売れ筋は、やはり“火の鳥”、“アドルフに告ぐ”等のマンガがよく読まれているようです。かく言う私も、試験前、勉強しに来ていたのに、ついマンガに手をつけてしまい、勉強が手につかなかった、という苦い経験があります。他には、ゾドニィ・シェルダンの本がよく借りられていきます。私も、友人に“ゲームの達人”を借りて読んだ時は、あまりに面白く、半分徹夜をして読みきってしまいました。まだ読んでない、という人がおられれば、是非読んでみて下さい。1作目の“ゲームの達人”は非常に面白く読める事は保証します。

よく読まれる本は以上ですが、自分が読んで面白かったから、みんなにも読んで欲しい、という本や、読んでみたい、という本があれば、希望図書のノートや、学生選書のアンケートに書いて下さればいいと思います。自分が読んで面白かった本なら、きっと他人が読んで面白く思いますので、どんどん書いて下さい。そうすれば、図書館の蔵書も次第に充実してゆくものと思います。

## 「一言」

機械工学科 児玉大輔

僕にとって高専生活は、非常におもしろいものであり、また、非常に有意義なものであった。

数学のK助教授のようなおっさんにも知り合い、クラブで副部長などもやり、卒研では、某メーカーのSさんのようないいかげんな人にも知り合い、それなりに世間を垣間見たような気がする。

しかし、一部消え去る者や、飛入りする者がいても、所詮、自分のまわりでは五年間同じ風景が展開されている。勉強を捨て、バイトにはびむか、ダブるか、留学でもしないかぎり、この風景を変えたり、高専外の世の中というものを体験することは難しい。読書である程度おぎなえるが、実体験を伴わない読書は所詮机上の空論であると思う。最近、知識・理論ばかりで、実践の伴っていない人々が多いように思う。他人の体験・知識等をさも自分が体験したように思っているやつが多いこと。やはり、人間は行動から学ぶのであって、頭だけで学ぶのではないと思う。まれに“天才”という異人種もいるが……。ありふれた言葉ではあるが、人間若いうちは失敗を恐れず何でもやってみるものだと思う。僕自身高専生活で成功だと思えるのは、長い6年間（ダブってるので）で3つぐらいしかないように思う。が、充実感だけは、誰にも負けないような気がする。

以上、若干堅いことを書いてきたが、ここで在校生諸君に一言授けよう。友達は大事であるが、あまり群れてばかりいないで、自分自身がやりたいことを自分自身でやってみよう、たまには…。

## 卒業するにあたって

電気工学科 下村信仁

昨日、卒業研究の諮問会が終了することで、私の高専生としての一通りの生活も終り、ほっと一息ついているところです。

卒業生を代表して、ということで今回の原稿をお引き受けした訳ですが、実のことをいうと、本当に卒業できるんやろか？と不安になっていました。ところが、そんな思いもどうやら杞憂に終り

無事、皆と一緒に卒業できそうです。

私はあまり優秀な学生ではありませんでした。むしろ、先生方にとっては、厄介な手のかかる学生だったように思います。恥ずかしながら成績はずっと下から数えて両手で足る程度でしたし、無許可で自動車通学し、注意を受けたこともありました。授業中、後ろの出口から抜け出し、友人と凌雲館でさぼっていたこともあります。しかし、卒業を間近に控えた今となつては、その一つ一つのどれもが楽しい、大事な思い出の様に思います。私の周りにはいつも仲間が大勢いてくれましたし、そのことを私はとても誇りに思います。悩み事を打ちあけると、真剣に私の為に答えを見つけ出そうとしてくれました。また、とりとめのない馬鹿げた話と一緒に興じたり、真夜中遅く明け方近くまで遊び回ったり。

学生の本分が勉強することだとすれば、私はその本分を全うしたとは決していえません。しかし学生の間にはかできないようなことを数多く経験できたと思っています。前者と後者のどちらを選ぶのか、また、どちらが正しいのか、それは人それぞれだとは思いますが、一つだけ、どちらを選ぶにしても大事なことは、自分自身で納得して、その結果に後悔したりするようなことはしないように心掛けて欲しいのです。私の場合は明らかに後者でした。先の事を考えてとか、将来の為にとかいうような事より、とにかく今日一日おもしろおかしく過ごすことしか頭になかったように思います。

そのツケというか代償というかそういうものが社会に出るこれからの私の生活を前途多難なものにするでしょう。自分の力ではどうにも乗り越えられない、果てしなく高い障害になるかも知れません。でもそのことを、その原因を学生時代遊び呆けていたことと結びつけたくはないのです。というより、結びつけてはならない、と思うのです。あくまでも思い出は楽しい思い出としてずっと残しておくように、自分がかまく行かないときの言い訳の道具にはしたくないのです。今、私は奈良高専で5年間も過ごせたことを嬉しく思います。これからまだ奈良高専生として過ごす皆さん、卒業するとき“この学校へ来て本当によかった”と心から思えるような学生生活を過ごして下さい。目先のことを考えずむやみに突っ走ってみるのもいいと思います。一度、頭を打たれてからでも学

生の間ならやり直しがきくと思うのですが。

最後になりましたが、5年間を通じて御指導頂きました、電気工学科並びに一般教科の諸先生方に心から御礼を申し上げます。ありがとうございます。そして何よりも5年間苦楽を共にわかった電気工学科の皆様にも心より感謝の気持ちを表し御礼申し上げます。ありがとうございます。これからは共に奈良高専の卒業生として頑張ろう。そして時間がとればまた集まって学生時代の思い出話や近況報告をして盛り上げられればいいのになって思う。約束やぞ、絶対。

次に私が大和郡山の駅のプラットホームに立つ日はいつなのでしょう。次に奈良高専の校門をくぐる日はいつなのでしょうかねえ。ぼんやりそんなことを考えながら卒業式まで一ヶ月過ごすのも悪くはないなあ。

——今週の金曜日、大阪城ホールへ

Dreams Come Trueの

LIVEを観に行きます。来月末には長渕剛のLIVEもあります。とことん最後の最後まで遊ぶことばかりです。でもドリカムはアリーナの最前列の席が取れたんですよ。うらやましいでしょう。あー楽しみだー。——

先生方、どうぞお健やかに。これからも多方面にわたる御活躍をお祈り申し上げます。

ありがとうございました。さようなら。

名ばかりの図書委員長から一言

機械工学科 田口 努

五年間で、どれくらい本を読んだのだろうか。レポートのために専門書を借りて引用したぐらいと思う。専門書以外では、雑誌コーナーのNewton、科学朝日、motor、そして、ながめるだけのパソコン誌、あと、まんがコーナーに置いてあるのを読んだ。(これは一年のとき何から読んだらいいのかわからなかったの。)日本文学全集とか、図書委員長だから読んでいるだろうと思いきや、全々、そうする前にレポート書き、LD鑑賞、昼寝などおおよそ考えもつかない事態である。まあ、一言いうと、テスト前に自習室として活用するのはいい

いが、雑談の場所と化しているといぶかっているのは図書館の係の方々だけではないのである。人の集まる所はにぎわうとあるが、場所をわきまえよう。

個人として、図書館の本は多くあると思うが専門書の中には開けると数式が列挙してあってすぐ本棚にもどしてしまいたくなる本もある。そういう古い本が多いと思える。どんどん新しい本が入っているが、本を返さずにそのままという状態で、水槽の水をたそうと思っても、入れた分だけ流れていくので、良識を取りもどして、ふたをしなければならぬと思う。

読書は、読み書きのためというよりは、単に書を読むわけだから、広い意味で書いてあるものを読めばよい。そんな軽い気持ちでよめばよい。いつも机に向かって学校の勉強のように考えると、なかなか読めない。書を読むことによって、自分の考え、生き方を再考慮する。簡単に言えば、自分の意見を持つ。同時に、他人の意見を考慮する、心を開くということだ。そういう自分を見つめる時間がないと、この情報型時代に自分を見失い、広い考えに流されてしまうのではないかと不安になる。そういう時間を読書を通じて得れば、意義深いものになるだろう。

## 最初で最後の長旅

情報工学科 中山敬三

祖父の家には、360ccのスズキフロンテと言う車があった。この車は、僕よりも年をとっている。今年になって祖父は、視力低下のため免許の更新が出来なかった。そこで、僕がこの車を引き取るようになった。車は岡山、僕の家は奈良。この間200kmをどうするか。選択肢は、陸送屋に頼むかフロンテに乗ってくるかのどちらかだ。結局、僕はフロンテに乗って200kmを走ることにした。

出発の日、いきなり母が「一緒に乗って帰る。」と言い出した。それまでは、母は新幹線で帰るはずだったのに。そこで、僕は母を諦めさせるために、祖父に「二人乗って200kmも走ったら壊れるやろ？」と付加疑問文風に聞いた。しかし、祖父は元気よく「まだまだ、この車は元気。大丈夫。」と答えた。仕方なしに、母を乗せて、フロンテは出発した。

途中のガソリンスタンドで、プラグをひとつ交換し、ここでフロンテは祖父と伯父と別れを悲しんだ。第一の目的地は、中国自動車道津山インターだ。ここから、一時間くらいだ。しかし、ちょっと走りだしてからフロンテの調子がおかしくなった。アクセルを踏んでも50km以上スピードがでないのだ。きっと、二人乗っているせいだ。フロンテを道の端に止め、伯父に電話した。20分後、伯父が来た。これこれと症状を説明し、伯父がフロンテに、僕が伯父のカローラに乗って、先ほどのガソリンスタンドに戻ることにした。しばらくすると伯父が、OKというサインをした。確かに、フロンテは70km以上のスピードで走っている。車を止めると伯父が「大丈夫。」と言った。しかし、よく考えてみると、車を乗り換えるときに母も乗り換えている、つまりその時にフロンテには一人、カローラには二人。以上のことからフロンテは一人で乗ると問題ないが、二人で乗ると駄目ということだ。しかし、周りの雰囲気流されて、「大丈夫じゃない。」と言う気持ちを心の中でしか叫べなかった。

一抹の不安を残しながら（僕の心のなかだけに）フロンテは、二人を乗せて順調に（伯父の目には）走り出した。少し走ると、この一抹の不安はぶっ飛び、絶望へと変わった。この絶望と二人を乗せたフロンテは、なんとか津山のインターにたどり着いた。そこで、僕の目に、赤い回転灯が入ってきた。警察がインターで検問をしていたのだ。車の免許を持っている人なら知っているように高速道路は、50km以上の速さで走れる車しか通ることができない。しかし、その時二人を乗せたフロンテにとって50kmという速度は天文学的数字に感じられた。ドキドキしながら、警察に近づいて行った。「免許証。」と言われた僕は、素直に免許証を渡した。「古い車ですね。気を付けてください。」と警察官が明るく言いながら免許証を返してくれた。「ふう、無事検問は突破した。」と言う犯罪者の気持ちを味わいながら、フロンテは走り出した。しかし、警察が見逃しても事実は事実。いっこうにスピードが上がらない。坂にさしかかると20km出ていいところだ。そのため、母をバス停で降ろした。しかし、「よーし、これで大丈夫。」という僕の気持ちはすぐさま無くなった。既に、フロンテの疲労は限界に達していたのだ。「もう、高速は使えない。」と感じた僕は、兵庫県のまん中辺り

で高速を出た。

そうこうしているうちに、日が暮れた。明るい時分は、周りの人間は「遅い車やな。お、360ccか」と珍しがっていたが、暗くなると「遅い車やな。どかんかい。」に変わってきた。それを察したのか、フロントは中環を70kmものスピードで走った。大阪から奈良へは阪奈道路とR163のどちらかを使わなければならないが、僕はフロントに清滝峠（R163の奈良と大阪の境にある峠）のアタックを命じた。阪奈道路は流れが速いからだ。しかし、R163の流れもフロントには速すぎた。後ろの車がパッシングしてくる。「このままでは死んでしまう。」と思った僕は、峠の途中の交差点（楠公里交差点）で左に入った。そこは、住宅街だった。しばらく休憩した後、フロントは再び清滝峠をアタックするため動きだした。そして、楠公里交差点で、シグナルが青になるのを待っていた。青になった。この瞬間、フロントと僕は蟻地獄に捕まっていることを悟った。アクセルを踏みクラッチをつないだ。しかし、フロントは動かなかった。坂が急で、坂道発進が出来ないのだ。そこで、他にR163に戻ることに出来る交差点がないか探し始めた。しかし、住宅街と言えども、清滝峠にある住宅街。坂がないわけがない。すぐに、「下手に動くと、さらに状況が悪くなる。」と感じた。まるで、雪山に迷ったようだ。そのせいか、寒さも感じられる。救援を呼ぶことにした。

40分後に、JAFが来た。よく見かける型の車だ。「いい車ですね。」と言いながら、JAFさんはてきぱきと仕事をこなしていく。ついに、フロントに固定されたウインチが勢いよく上がった。「助かった」と思った瞬間、ウインチは弱々しく下がっていった。再び、JAFさんが仕事をしだした。到着してから30分後、再びフロントの前輪が、ウインチよって持ち上げられた。そして、JAFさんが僕の方を見た。目が合った。嫌な予感が心によぎった。JAFさんが「ちょっと、ここ見てもらえますか。」とウインチで前輪を止めているところを指さした。それから、1分程説明した後、「この車では、牽引は危険です。」と言った。「天下のJAFもこれまでか。」と思った瞬間、「牽引専用の車を呼びましょう。」とJAFさんが言った。「さすが天下のJAF。」と思いながら御言葉に甘えた。再び、フロントは下げられ、ウインチからはずされた。去ってゆくJAFの車を、フロントと僕は見送った。

40分後、第二救援部隊が到着した。JAFさんが仕事を始めた。先ほどとはウインチの形状が違う。さすが専用車だけあって、みるみるうちにフロントがしっかりと固定されていく。JAFさんが僕の方を見た。目が合った。「トラックの助手席に乗って下さい。」と言った。成功だ。さすがJAFさん、頼りになる。そして、フロントを引っ張りながらJAFの車は、清滝峠を登って行く。ついでに、飯盛霊園まで下ってもらった。そして、フロントはそこから再び自力で走るようになった。JAFさん曰、「先に出発してください。見届けますから。」心の中で、僕は「ありがとう。」を何度も繰り返しながら、フロントのアクセルを踏んだ。約5km、お金にして9000円。でも、僕はJAF会員なのでタダだった。しばらくすると、僕の目に再び赤い回転灯が入ってきた。しかし、今度は何も悪いことをしていない僕にとって、平坦な道の赤信号で止まるのと同じことだった。結局、岡山を出たのが10時、家に着いたのが夜の1時、のべ15時間の旅になってしまった。

その後、フロントはデストリビュータの一部を新しいものに替え、次の出番に備えてカバーにくるまって眠っている。

## 本を読まない人たちへ

化学工学科 今中見名子

誰かに読んでもらう文章なんて、何を書けばいいのか分からないので、活字に慣れ親しむという事には縁遠い生活をしていた私が、気がむいた時ぐらいは本を開くようになったキッカケについて書いてみました。

私は、特に興味を持たない限り孤独の中で何かに集中して取り組む事はニガテで、私にとっての読書に対するイメージは正にこれでした。何も娯楽のない時代でもないし、読むという苦勞なしに情報はテレビや友達との雑談で十分吸収できると思っていました。しかし年を増すにつれ、貧困な話題性や複雑な意見の表現に、つまってしまいました。私は人と接する事が好きで、どうにか私の考えをわかってほしいし相手を深く理解したいのに、自分の表現方法が自分でよくつかめないうもどかしさでいっぱいでした。例えば、自分では自己主張のつもりでも上手い表現ができなくて、単な

る我がままに見られてしまうという様でした。そんな頃、「一人乗り紙ひこうき」「夜中の薔薇」というエッセイ集に出会いました。それぞれ岸田今日子（ムーミンの声）、向田邦子の作品で、活字に慣れていない私でもすぐに馴染んでしまえる本でした。今でも、2冊共手元に置き時折読み返している『これ絶対おススメ』の本です。特に、女性、本を読まない人、独創的な人におススメします。読書は、感性や想像力を心地好く刺激し、気分がぬうちに表現のうまさや自分のものにできるというメリットがある事に気がきました。本を読み慣れない人が長編有名文学小説を集中して読むなんて疲れるだけでしょう。まづ、活字慣れるのに短編やエッセイを流し読みして、その後に思考力を磨く本を読みこなせるようになればいいと思います。短編でも優れた作品はあるし、エッセイなら楽々読めてその著者の考えや生活に触れられると思います。読書する事から自分の表現方法を磨き、豊かな感性を身に付けられるのは、学生である今がチャンスです。また、学生の特権の図書館利用も忘れないで下さい。本の紹介ではおもしろそうでも買って読んだらつまらなかった事ありませんか？図書館では立ち読みしてもいい、充分時間をかけて本を選べます。本の選び方がわからない人は、流行の本や貸し出し印の多い本を読むのもいいし、図書室の係の方々にアドバイスをお願いしてみても快く対応して下さいます。本を買うのは図書館の本に飽きてからでも遅くないし、読みたい本は図書の係の方々にお願いしてもいいし（国の予算で本を買えるのは学生の間だけです）その上LDやビデオまで見られるのです。稚拙な文章で申し訳ありませんが、図書館へ遊びに行く人が増えれば幸いです。

## 読書のこつ

化学工学科 川西雅子

「図書館だより」に載せる原稿を何か書いてほしい。と図書館の人に頼まれたのですが、実際何を書こうか困っています。

“たくさんの本を読みましょう。”とは私は勧めません。読めばいいというのではないからです。人によって好きなジャンル、嫌いなジャンルといういろいろあります。自分に合った本をじっくりと読

むことが大切だと思います。本を読むのが速いか遅いかは関係ありません。おもしろい箇所はどんどん先を読みたい一心で速くなるだろうし、おもしろくない箇所は誰が読んでも遅くなると思います。私の場合はおもしろい箇所を何回か読み返すので反対に時間がかかってしまう時もあるのですが。本が嫌いという人がいますが、これは最初に読んだ本があんまりよくなかったという人か、単に活字を読むのがめんどくさいという人でしょ

う。最初に読んだ本がおもしろかったか、そうでなかったかはとても重要な事だと思います。一度おもしろい本を読んだら、その作家の本を好んで読む事が多くなるし、暇さえあれば今まで家にかざってあるだけの本なども読んでみようという気になるかもしれないからです。今頃、本屋さんで映画の内容がそのまま文庫本になっているのをよく見かけます。本と映画で内容が少し変えてあるものも多いようですが、私は暇な時にちょこっと読むにはいいと思います。文学と言われているものだけが本というわけではないと思います。推理小説やエッセイなど自分の好む本を楽しく読むことが一番いいと思いませんか？

高専の場合、週休2日制になった事もあり自分の時間をとれるようになったと思います。本が好きな人は、この事を大いに利用してほしいと思います。本も何冊もとなると値段的にも高くなってしまっているので、買ってまで読もうという人は少なくなるでしょう。高くても自分で買えなければ、図書館でいれてもらえばいい事だと思います。幸い、私は読みたかった本はほとんど図書館に入っすぐ借りていました。

本を読む事によって得た物は？と聞かれると返答に困りますが、自分自身の中では考え方が豊かになったのではないかと思います。本の内容などは自然と吸収されているのでいちいち思い返す事もないのですが、何かの際に自分の言った事や考えが重なる時があります。同じ本を読むにしても昔読んだ感想と今読んだ感想が必ずしも同じというわけではないでしょう。一度読んだ本をまた違った角度から読んでみるのも楽しいものです。本の読み方など人それぞれだと思うので、自分だけの読書を楽しんでほしいです。そして、本嫌いの人も本を読むのが好きな人も、自分を豊かにしてくれるような一冊に出会えたらいいですね。

# 心に残る一冊の本

—〈あなたにも薦めたい〉— (その4)

青春時代は人の一生の中で最も輝かしい時代です。その輝きは、「若さ」という生物学的要因に基づくものであるため、誰にも平等に与えられています。しかし、若さの輝きは、やはり年齢という生物学的要因によって年とともに失われていきます。それに対し、知性と教養により自己の内面から発する輝きはいくら年齢を重ねても一生消えることはありません。

知性と教養の鍛錬は、勿論いつ始めても遅すぎるといことはありません。しかし、やはり最も効果的な時期というものがあります。それは、いま諸君がいる青春時代です。この時代に出会った「心に残る一冊の本」は人の一生を通じてその人の輝きを支えるエネルギー源になります。そのような本は時代を超えて生き続けます。そこで、諸君の参考になればと思い、先生方からそれぞれの一冊を紹介して戴きました。

## ヘンリー・ジェームズの「ある婦人の肖像」 一般教科 片山悦男

ヘンリー・ジェームズは一九世紀末から二十世紀初頭の世紀末の時期に、アメリカ、イギリス、フランス、イタリアなどを股にかけて、当時の世界的文豪、ツルゲーネフ、フロベール、ゾラ、モーパッサン、エリオット、コンラッドなどと榮んに交遊して、独自の小説技法を開発し、二十世紀に伝えたアメリカの作家です。

「ある婦人の肖像」はジェームズの最高傑作の一つで、難解な作品でした。私はそれまで、日本や欧米の色々な小説を読み、小説に対する理解に

はある程度の自信を持っていたのですが、その私の自信に一石を投じ、疑問を抱かせてくれたのがこの作品です。この作品を私なりに理解するのに数年かかりました。一つの小説を理解するだけのために数年かけるというのは途方もないことなのですが、事実なのです。

興味のある学生諸君は、一つ挑戦してみてください。訳本は、筑摩書房、筑摩世界文学大系49の「ジェームズ」の中に収録されています。

## 「モモ」 ミヒャエル・エンデ作 機械工学科 福 嶋 克 彦

「充分休んだらう、さあ行こう」アンデスへ調査に来た民俗学者が、ポーターに雇ったインディオを急がすと「休んでいるのではない、後から来る魂を待っているんだ」。

モモと一緒にいると魂の時間を過ごすことができる。子供達は、自然に色々な空想に富んだ創造的な遊びができる。ケンカしていても、モモが見ているだけで仲なお。歌を忘れたカナリアは孤独である。魂が戻ってくるまで、モモは耳をすまして一緒に待ってくれる、一週間も経つと楽しそうにさえずりはじめる。魂の時間は金にならない、「時は金なり」という人にとって、それは無駄な時間である。そうやって人々から時間の花を掠め取るゾンビーのような灰色男の団が現れて、人々の中に忙しきの渦を巻き起こす。盗まれた時間の

花は、時間ドロボーの巣窟の金庫に冷凍保存されて、男たちの命をつなぐ葉巻タバコの原料にされている。一人の灰色男と接触したモモは「貴男には愛がないのね」といったとたん男は秘密を全部べらべらしゃべってしまう。

時間の花を配給しているマイスター・ホラはこの事態を憂えて、カシオペイアという名の亀をモモに使わし、時間ドロボー退治を計画する。ハラハラするいくつかの場面を経て、モモにより金庫から時間の花は解放され持ち主のところに帰り、危機は脱し、人々は灰色男の現われる前の生活に戻る。

子供達が探検船ごっこして遊ぶ船の名前がギリシャ神話の一つの黄金の羊毛を求めた「アルゴ号」と同じであったり。マイスター・ホラの家が

「どこにもない家」で従ってここにもない家ということになり、それは、トロイア戦争後放浪するオデュッセーが一つ目の巨人キュクロプスに名を尋ねられて「タレモナシ」だと答えるのを思い出させてくれる。マイスター・ホラがモモに過去・未来・現在を三兄弟になぞらえて、答が時間である謎々を出す。聖アウグスチヌス「告白」の中の

有名な言葉「時間とは、もし誰も私に問わなければ、私は知っている。もし問う者に説明しようと思うと、私は知らない。」と較べても面白い。モモが盗まれた時間を取り返す事業は、ツヴァイクのいわゆる「人類の星の時間」に記されるべき仕事であることが仄めかされている。物語の筋以外にも楽しめる処が多い。

## 『ビルマの豎琴』と『アーロン収容所』 電気工学科 京 兼 純

JICAの仕事に携わった関係上、最近は国際協力に関する本が目につくことが多くなっている。

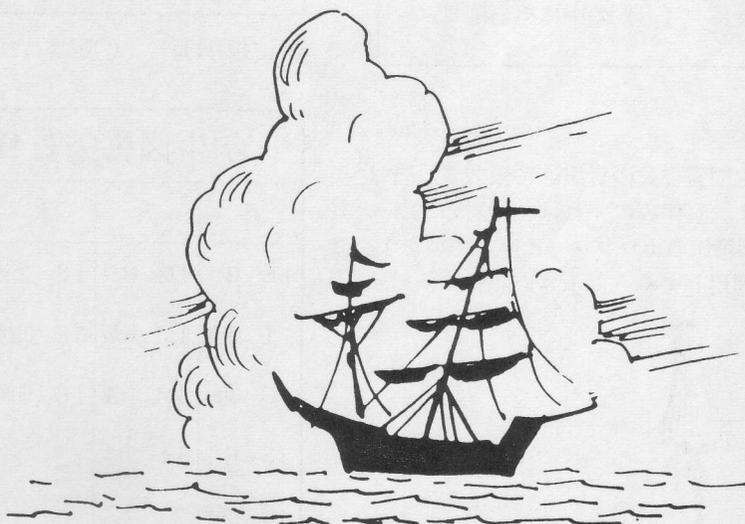
特に連日マスコミを賑わしているカンボジアでPKO問題等は、平和時における援助活動とは異なった次元で、国際協力とは何かを考える上で恰好の材料ではないかと思っている。こうしたPKO活動において、2人の日本人を始め多くの外国人の痛ましい死があり、これらが強い衝撃となって世界を駆け巡ったことは記憶に新しいところである。

カンボジアからタイ国を一つ隔てた所にミャンマーがある。1988年9月18日流血クーデターで、これまで慣れ親しんだビルマからミャンマーへと名前が変わり、それと同時に首都もラングーンからヤンゴンとなった。ミャンマーという国名とそ

の状況はアウン・サン・スー・チー女史のノーベル平和賞により浸透し、為政者にとっては何とも皮肉な出来事となっている。

この地を舞台にした『ビルマの豎琴』という作品がある。何回か映画化もされ、すでに幾人かの学生も読んでいると思う。また同様に旧ビルマでの体験を描いた作品に、会田雄次氏の『アーロン収容所』がある。いずれも先の大戦での出来事を題材にしたものである。これらの作品は、国際協力や援助活動と民族あるいは文化という視点から捉えた場合、非常に示唆に富んだものであると考えている。

まもなく読書感想文コンクールの時期でもあり、上記作品を参考図書として推薦しているので、低学年の諸君は是非読んで戴きたいと願っている。



# 図書館委員会報告

本年度の図書館委員会のメンバーおよびその役割分担が下表左のように決まりました。本年度は図書館長に一般教科の細井誠司先生が就任されました。委員の先生方は、昨年度から引き続いておられる方もおられますし、新しく委員になられた方もおられます。いずれも張り切っておられますので、きっと素晴らしい委員会になると期待しています。

また、学生図書委員会のメンバーも下表右のように決まりました。委員長は4Sの中居亜子さんです。中居さんは、得意の絵の才能を生かして、早速、素晴らしい仕事をしてくださいました。このLibrary Newsの表紙の絵がそうです。フラゴナールの「読書する女」の模写です。本当に素晴らしい出来映えです。

図書館委員会		
館長：細井		
図書部会	視聴覚部会	研究紀要部会
○河 越(月) 片 山(月) 福 嶋(金) 野々垣(金) 早 川(火) 木 村(火) 鈴 木(木)	○田 中 岸 下(火) 木 村(火) 下 村(木)	○京兼 (木) 片山 (月) 野々垣(金) 早川 (火) 下村 (木) 直江 (月)
○印は部会長：( )の中は担当曜日		

学生図書委員会					
クラス 学年	M A (M)	M B (S)	E	I	C
1	秋口 和弥 板坂 友義	西島 寛典	林 望	藤森 文夫	梅戸美知恵
2	立上 隆裕	山田 政人	小林 龍爾	乾 孝司	田村 大
3	首藤 竜哉	○村井 祐子	大植 利泰	○山本 豊	小菅 暁生
4	真網 大輔	○中居 亜子	森 利勝	新造 誠一	日置 勝晴
5	藤本 周作	沖 英二	山口 順一	中野真由美	伊藤奈穂子
◎委員長 ○副委員長					

右表は、学生図書委員の貸出当番表です。皆はりきっています。昼休みにくれば、諸君のクラスの図書委員が図書館のカウンターに座っています。大いに彼らを利用してやって下さい。



学生図書委員貸出当番表				
月	火	水	木	金
1E 林	1M 秋口	1S 立上	1S 西島	2S 山田
1I 藤森	1M 板坂	3E 田村	3E 大植	2I 乾
1C 梅戸	3M 首藤	4C 日置	4S 中居	1I 藤森
3S 村井	3I 山本			
3C 小菅				

## 平成5年度 読書感想文コンクールについて

恒例の夏休み読書感想文コンクールを、図書館委員会と国語科の共催で行います。先生方から推薦されました図書の中から以下の30冊を「参考図書」としてリストアップしました。この外に興味のある本があれば、自由に他の本を選んで結構です。選択の目安として、1～2年生向きの本には☆印をつけました。また、◎印は人権問題関係の図書です。3年生は自由参加ですが、特にこの人権問題を感想文にまとめてくれることを期待しています。4～5年生も自由参加ですが、積極的に参加し応募していただくことを楽しみにしています。

### 《文学作品の部》

☆兎の眼	灰谷健次郎	新潮
☆ビルマの豎琴	竹山道雄	〃
☆伊豆の踊り子	川端康成	集英・角川
☆友情	武者小路実篤	新潮・角川
☆若きウェルテルの悩み	ゲーテ	新潮・岩波
◎橋のない川	住井すゑ	新潮
海と毒薬	遠藤周作	新潮・講談
華岡青洲の妻	有吉佐和子	新潮
お伽草紙	太宰治	〃
天平の甍	井上靖	〃
ねじの回転	ヘンリー・ジェイムズ	〃
シュールス・ジョー	W.P.キンセラ	文春
水中都市・デンドロカカリヤ	安部公房	新潮
シャーロック・ホームズの冒険	コナン・ドイル	新潮文庫
怒りの葡萄	スタインベック	新潮・岩波

### 《文学作品以外の部》

◎娘に語る祖国	つかこうへい	光文社
☆古代への情熱	シュリーマン	新潮・岩波
☆旅人	湯川秀樹	角川
☆アンネの日記	アンネ・フランク	文春
☆どくとるマンボウ青春記	北杜夫	中公
◎アフリカのこころ	土屋哲	岩波ジュニア
奈良の寺々	太田博太郎	新潮
映画を見ると得をする	池波正太郎	〃
忘れられた日本人	宮本常一	岩波
ベートーヴェンの生涯	ロマン・ロラン	〃
アーロン収容所	会田雄次	中公
チャップリン自伝	チャップリン	新潮
カオス	ジェイムズ・グリック	〃
生化学の夜明け	丸山工作	中公
童謡でてこい	阪田寛夫	河出

## 図書館からのお知らせ

○ブック・ディテクション・システム (B.D.S.) が設置されました。これは、入館者数のカウント及び貸出し手続きの忘れを防止するための設備です。7月より稼働の予定です。

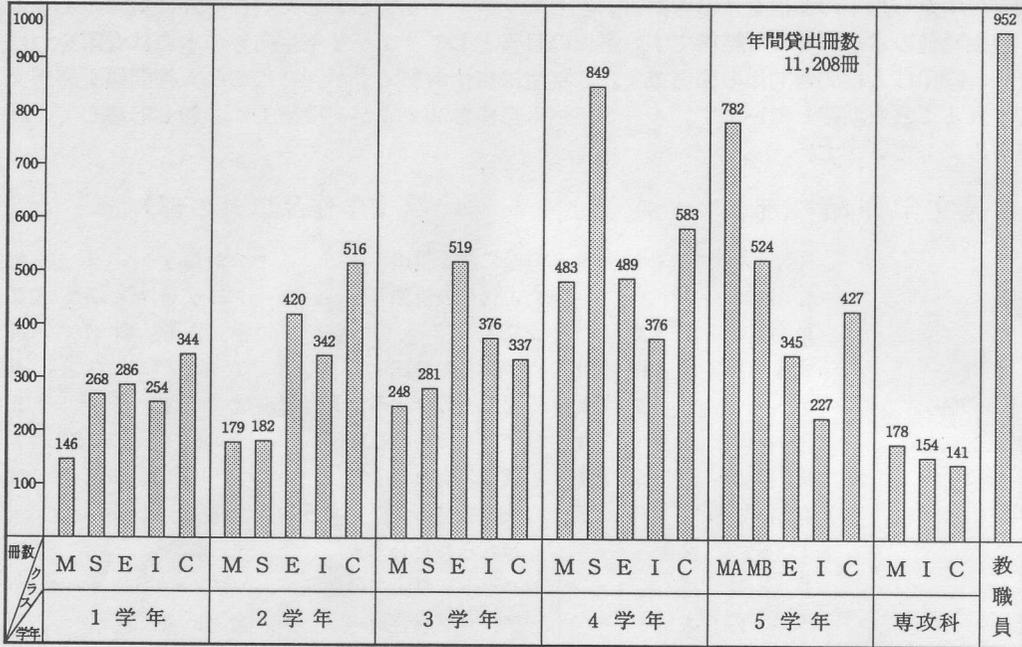
○夏期休業中、図書館の開館時間等は以下ようになります。(但し8月9日(月)から20日(金)は館内整理のため閉館します)

開館時間	平日	8:30～17:00
	土曜日	閉館
	貸出冊数	6冊

長い夏期休業中、大いに読書に励んで下さい。

# 図書館関係資料

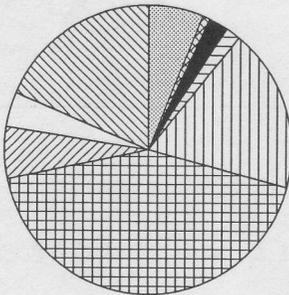
○平成4年度図書館利用状況  
〔クラス別統計表〕



○貸出図書統計表

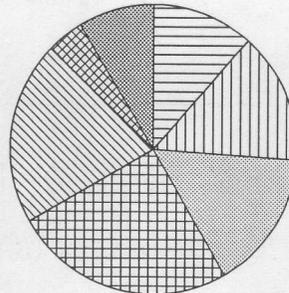
分類番号別統計表

総数：11,208冊



総記	712冊	6%
哲学	80冊	1%
歴史	246冊	2%
社会科学	202冊	2%
自然科学	2,048冊	18%
工学技術	4,754冊	42%
産業	16冊	0%
芸術美術	643冊	6%
語学	451冊	4%
文学	2,056冊	18%

利用者別統計表



1年	1298冊	12%
2年	1639冊	15%
3年	1761冊	16%
4年	2780冊	25%
5年	2305冊	21%
専攻科	473冊	4%
職員	952冊	8%

## 寄贈図書リスト

(書名)

(寄贈者名)

- |                           |              |
|---------------------------|--------------|
| ○ 燃ゆるとき (長編企業小説)<br>高杉 良著 | 著者           |
| ○ 積木の箱 (上・下)<br>三浦綾子著等18冊 | 本校卒業生 今中見奈子氏 |
| ○ 電気材料 高橋晴雄著              | 本校教官 高橋晴雄氏   |
| ○ パルス工学 //                | //           |
| ○ 工業英検試験問題集等 8冊           | //           |
| ○ 松下幸之助発言集29~45巻          | P H P 研究所    |

- |                              |             |
|------------------------------|-------------|
| ○ 大学課程微分積分学<br>外岡慶之助等著等約50冊  | 本校卒業生 唐橋 聡氏 |
| ○ さんすいー日本のエネルギー<br>と技術ー石井威望編 | 電気事業連合会     |
| ○ パブ 大英帝国の社交場<br>小林章夫著       | 本校教官 松井良明氏  |
| ○ パブリック・スクール<br>竹内 洋著        | //          |
| ○ 小説 会社再建<br>高杉 良著           | 著者          |

(1993.3.9~6.3受入順)